

青年期の危機についての若干の考察

—柳田邦男『犠牲』を通して—

甲南大学学生相談室 友久 茂子

はじめに

青年期が「疾風怒涛」の時といわれて久しい。確かに青年期は子どもからおとなへの移行期であり、自らの人生の方向づけを求められる時期である。そのため心的には激しい揺れを経験し、自らの存在を根底からゆさぶられることにもなりかねない。しかし、その苦悩が様々な想像性を刺激し、新しい発想を生み、豊かな文化を開花させてもきた。少なくともほとんどの若者が激しい揺れを感じながらも、身近な人間関係や社会とのつながりの中で大人への仲間入りを果たしてゆくことができた。

ところが、高度成長期以降の機械化、少子化、核家族化等による家庭機能の変化、あるいはテレビ、ビデオといった映像文化、携帯電話、パソコンといった情報文化の氾濫によって、社会とのつながりも、身近な友人とのつながりも変化し始めると、そういった社会の流れに、若者達は敏感に反応し、現実的人間関係もころのありようも変化せざるをえない。つまり、社会に溢れる情報を上手に選択し、かつ自らも自己に忠実な情報を発信することが必要である。しかし、筆者が相談室で出会う青年達の姿は、そういった社会の流れに沿うことが苦手であったり失敗していたり、意識的無意識的に拒否している場合が多い。従って人間関係は希薄になり、不安は高く悩みは深い。あるいは、人間関係や社会生活は一見健康に適応的に生きている若者の中にも、激しい孤独感を味わい、外見の豊かさとはうらはらに、殺伐とした空

虚な心的世界をさ迷っている者も少なくない。彼らは自らの心の求めに目を瞑り、周りの動きや要求に従順であり、その結果自らの存在意義を見失ってしまい、この場合も深い苦悩を抱えざるをえない。が一方で、葛藤や苦悩を意識することなく、一見平穏にまじめに暮らしている若者が、突然周りを驚かせるような行動をとったり、ひそかにストーカー行為をしていたりすることもさほど珍しいことではない。衝動的で動機無き犯罪といわれるものはそれに当たるだろう。この場合、彼らの多くは犯罪者として扱われ、深い悩みを抱えた若者とは対極の存在と思われがちである。しかし、果たしてそうであろうか。筆者は彼らの心性を「未熟さ」と「ずるさ」と表現した(友久；1998)が、その心の奥に潜む孤独感や空虚な思いは、多かれ少なかれ現代の青年達の多くが抱える同種の危機ではないだろうか。

熊倉伸宏(2000)は自らの臨床体験から、受診した患者の4割が深刻な自殺念慮を示したという。そして、「死」の願望は時代の病理であり、精神医学が最も力を発揮する重度の精神錯乱による自殺企図のみでなく、最近では豊かな社会生活を営みつつ、死への「いさぎよさ」を特徴とした自殺親和的自我を持った者も多いという。筆者も学生相談やクリニックにおいて自殺念慮をもつ若者が多いと感じている。しかし、ほとんどのクライアントはそのように語りながら、あるいは自殺企図を繰り返しながらも、なんとか死に至ることなく治療の方向に向かう。ただ、心理療法を日々の営み

とする者は、時に死に至らざるを得ないケースに出会う。この時治療者として、その結果に対して何らかの意味を探り、そのプロセスを振り返り、今後の治療のあり方に貢献することが、旅だったクライアントに対する責務でもあろう。しかし、死という結果を、親の育て方や学校での人間関係、あるいはそれに対する、教師や治療者の対応のあり方を原因として見出すことに、それほど意味があるとは思わない。死は起こるべくして起こる、布置されたとしか考えようが無いケースが多い。しかし、それは承知の上で、どのように些細なことでも、彼らの死から何らかの意味を見出し、それが不可解とされる現代青年の、心の現実を理解する手がかりになるのではないかと考える。

そこで今回は柳田邦男氏の『犠牲 わが息子・脳死の11日』（柳田；1995）を通して、青年期の若者の心の奥に潜む危機的状態について考察したい。

I. 「物語ること」の意味

ここでは筆者がなぜ青年期の危機を語るのに『犠牲』を取り上げたかについて述べておきたい。筆者は心理療法を仕事としており、数量という意味においては相当な人数のクライアントと出会ってきたし、現在も多くのクライアントと向き合っている。そんな中で、最近とみに感じることは、今の若者が「生」に対しても「死」に対しても現実感が薄く、実感を伴わない現実生活での悩みはきわめて深く、心理療法にかかる時間も長期間に及び、治療者がそこにかかるエネルギー量も高くならざるを得ない。しかし、一方で治療者にとっては自らの治療過程を振り返り、事例の検討をすることも重要な仕事である。ところが実際にはクライアントの悩みが深く重いほど、治療者が事例として検討することが難しくなってくる。それは、心の傷を負った人がその傷が重ければ重いほど語り出すには時間がかかることと同じである。このように「物語ること」のむつかしさについては柳田

が「体験と物語」（1997）のなかで、自殺した息子さんを持つ年配の女性が息子の死の真実を誰にも語るができなかった例等を取りあげていることからもうかがい知ることができる。筆者の場合、簡単に言ってしまうと、クライアントの悩みが重すぎて、未だに事例研究ができないでいると言った方が良いのかもしれない。

ところで、河合俊雄（1997）は事例研究におけるフィクションとノンフィクションの問題について「治療で語られることはクライアントと治療者との間で織りなされたフィクションなのである」とし、さらに「自分の受け取り方や解釈、理論的前提によって影響を受ける。それゆえに事例研究は決してノンフィクションではなくてフィクションなのである。」と主張している。しかし「文学も事例研究も『虚構でない』という点において『ノンフィクション』であり」「ノンフィクションであるかフィクションであるかに関わらず、現実性をどのように描き伝えるかが問題である」としている。

そこで、筆者は柳田の『犠牲』を取りあげた。柳田はもともとノンフィクション作家として様々な人を取材し、人々の生き方を語ることによって「人間とはなにか」「生きるとはなにか」と真摯に問いかけてきた人である。その柳田自身が愛息子の自死を体験させられることによって『犠牲』を執筆し、深く生と死について問いかけると同時に、自らの心の整理をつけていったものと考えられる。『犠牲』が父と子の間で織りなされたフィクションでありながら、虚構ではなく柳田の心的現実としてのノンフィクションであるとすれば、筆者は『犠牲』の主人公・洋二郎さんの心の現実にはせまってみたい。そのことによって現代青年の多くが直面する心の危機に、多少なりとも近づきことができればと願っている。

II. 洋二郎さんと父の思い

洋二郎さんは、1967年（昭和42年）12月18

日、NHK 記者柳田邦男氏の次男として誕生。彼は「ぼくが生まれた日はガルシア・マルケスが『百年の孤独』を発表し、日本では大江健三郎の『万延元年のフットボール』が刊行されるという重要な意味をもった年」と、意味づけている。

当時一家は調布市のNHKの寮に住み、家族は父母と3才年上の兄がいた。

洋二郎さんは、4歳の時自動車事故にあい1日意識不明状態となる。それを機に母親（当時35歳）は不安や抑うつを主症状とした神経症に陥る。これ以外、小学校入学まで反抗期がなかったことが記載されているのみで、幼児期の生活についてはほとんど語られていない。

私立T小学校に入学。T小学校は文部省の教科書を使わないのびやかな教育をすところと記されているが、洋二郎さんの小学校の生活についてもほとんど触れられていない。

中学高校は、そのままT中学高校に進学。T校は大学受験のための進学校化したところであったようだ。中学2年の3学期、学校で右目にチョークをぶつけられ眼房内出血。その治療の際、眼球に直接注射をされ怖さと痛みで襲われる。それをきっかけに失明恐怖から視線恐怖、対人恐怖、強迫思考を主訴とする神経症に陥る。退院時「右目の視野の中央付近に黒い点があって邪魔になる」と訴えたが、主治医は「無いものは無い」と叱りつけ、洋二郎さんは「あんな奴医者じゃない」と、怒りをあらわにしているにもかかわらず、その時父親として何の抗議もできなかった自らの弱さや、中高の間、洋二郎さんが心の病であると気づいていなかったことを父は何度も悔やんでいる。そして、このように心の病へと向かっていかざるを得なかった深い傷つきについて、父親は次のような出来事をあげている。眼の治療のため入院中に学校は期末試験中だったことを洋二郎さんは大変気にしていたが、退院して真先に投げつけられたのは「柳田はいいよな、眼の怪我で試験を受けなくてすんだんだから」という言葉だった。また、高

校1年のとき、級友の父親が亡くなった。教師がそのことをホームルームの時間に報告したが大部分の生徒は大した関心を示さず、私語や談笑でざわついていた。その時、洋二郎さんは「友達のお父さんが亡くなっているのに、みんな笑っているのは失礼だと思う」と発言した。すると、「ヤナ（柳）はみんな仲良くだからな」と、爆笑が起き、洋二郎さんは言葉を失い、逃げ場を失ったという。そして、父はその出来事が洋二郎さんに決定的に精神的ダメージを与え、その後いちだんと無口になっていったのではないかとしている。その後死の2年ほど前に『迷宮の孤独』とタイトルをつけ、結局遺書となった洋二郎さんの作品の中に中高時代の経験について書いた個所がある。それにはカフカの作品を、自らの存在とだぶらせながら次のように記している。「ぼくは、地獄だった中・高時代を思い返す。ミスター『無用の人』、常にそうしたレッテルを貼られ、疎外地獄だった。ぼくは、1日中、教室という閉鎖空間で一言も喋らず、地獄で凍った炎だった。眼の怪我で知った苦痛が怖かったから自殺しなかっただけだ。死んだ蛙に電流を通ずる実験のように、奴らが一方的に話しかけてくるとしても、それはいつも同じ一言だった。『おまえ、いたのか』嗚咽すらも凍結してしまった。……」そして、この文章に対して父は息子の弁明を書いている。それは『奴ら』という表現は級友たちを憎んで呼んだのではないことと、彼が周囲の人を非難したことがないことである。また、父親は後に洋二郎さんから『中高時代は生きられた時代が無かった』と、繰り返し聞かされたと言っている。

高校3年の時はいつもどこかぼーとして、受験勉強に手がつかなくなっていた。この頃から日記をつけ始めているが意味不明の部分が多いという。

一浪してA大学物理学科に入学する。物理学を専攻したことに對して、父は洋二郎さんにとっては「人間から一番遠いところにある学問」だったのではないかとしている。しかし入学後『留年す

る』と試験を受けず、哲学や文学の本ばかりを読んでいた。それに対して父は『モラトリアムの時代だから、本を読みたいときは読んでいればいいよ』と深層にあるものを見ようとせず、中途半端に理解を示す親を持った子の不幸を絵で描いたような構図』と記している。

1998年2月、大学1年20歳の春、キリスト教のサークルに入り、2泊3日の合宿から帰った日の午後、2階の自室で鉄アレイを窓に投げつけてガラスを壊し、そこから飛び降りようとする洋二郎さんを、お手伝いさんが発見。30分後父親が帰宅した時に、洋二郎さんは西日に向かって『太陽に向かって走るんだ』と叫んでいた。父親は親しい精神科医に受診させ、翌日H市A病院に入院。その時になってやっと息子の心の病に気づいた父親は「なんで早く気づいてやれなかったかと、断腸の思いは今も消えない」と記している。そしてその頃、大江健三郎の『万延元年のフットボール』を病院で読んでいた洋二郎さんが、サルトルの「絶望のうちにあって死ぬ。諸君はいまでも、この言葉の意味を理解することができるであろうか。それは決してたんに死ぬことではない。それは生まれでたことを後悔しつつ恥辱と憎悪と恐怖のうち死ぬことである、というべきではなからうか。」という言葉に出会い、父親に電話をかけてきて、そのまま失神してしまったと言う出来事が起こる。そして、彼はその言葉をサークルの黒板に書くことで年上のクリスチャンに「暗い」といじめられた体験を日記に残している。

1988年大学2年になる頃から、彼が残した日記に彼自身の苦悩が読み取れるようになり、父親は『21歳の日記から』として、ページを割き、それに父親のコメントを書いている。

1989年1月1日、「私は落伍者である。神には遠く、手がのびない。」と絶望感を書きとめている。2月8日、密かに思いをよせていたM子に「すてきです」と電話で言った日、「ぼくは恋愛でもない失恋でもない第3の道を進みたかったのだ

…」。「この出来事はぼくの期待を『更新』した。」と記している。この「期待」という言葉について父親は「心の病気が軽くなり、人とふつうのつきあい方ができるようになれるのではないかという『期待』、あるいは今日という1日だけでも、恐怖や苦悩から解放されて過ごせるのではないかという『期待』を意味していた。」と、コメントしている。3月4日、「母親曰く『かわいいじろう、ママの宝』母親のこの言葉に腹を立てたぼくは、父親に彼女を病院に入れるよう要求した。」そして兄も神経科へ入院をしており、自分も入院することになれば「父親は憔悴するだろう。」と記し、ブレイクの詩を引用して「父さん！父さん！どこへ行く？おお、そう速く歩かないで、話して父さん、この小さなぼくに話して、でないとぼくは迷子になる」と書いている。この日の日記に対しては父親の長いコメントがある。それによると母親はすでに神経の糸が切れて、20歳を過ぎた息子にさえかわいいと言う感情をだすのみだったこと。しかし、それは洋二郎さんにとって耐えがたいことだったこと。そして父親は「アンドロジナス（雌雄同体）！」と罵声をあびながらも家事など母親の代役をこなし、息子の自立の糸口を求めて話し相手になったり、助言をしたり、こもりきりにならないようにケアをするが、そうすればするほど依存関係から抜け出せなくなり、次のように記している。「1日1日が暗中模索だったし格闘だった。もはや家庭などというものは崩壊していたのだった。」この頃からB病院のY先生による精神療法を受け始めた様子。日記の中に「Y先生の言葉」として、何度も出てくる。例えば「家族へのアンビバレントな感情を観念的な葛藤の末、暴力に表してはいけない。」「現実からひどく遊離した空想の世界で他の人々を理解している。」といった具合である。そして、A大学に入って2年留年し、3年目、休学届は出していたがクラブには出かけ、その時のようすを「友だちをつくり、友だちに会い、孤独な異端者から解放されるとい

う、いつもと変わらぬ目的をもって、ぼくは学校へ向かったのだ。だが、どうして異端なんだろう。ぼくは車の車種を知らない。(中略) 生きる喜びを知らない。友人を知らない。」6月には「モトリアムではなくアナーキーなぼくに、Y先生はアルバイトをしろといった。」と書き、父はその日に彼がパニックを起こしたと記している。そして、父はアルバイトが無理ならボランティアをと、その手はずを整え、週に4回4時間のボランティア活動に出かけるようになる。

89年暮れにはクラブの友人E子に告白するが、年が明けてE子が別の男性と付き合っていることが判明している。父によると、その後も何度か女の子に想いをよせながら何もできず、苦悩の独白を綴っているという。それを「音楽で言えば短調のトーンで一貫している。」と表現する。このころ、Y先生の精神療法は「きつすぎる」とやめて、K医師に戻り、ボランティアにも行けなくなっている。しかし、90年5月頃になると、日記の文章にリアリティがでてきて、日常の出来事を事細かに書き記すようになる。それを父は「世界をネガフィルムでしか見ていなかった洋二郎がポジフィルムで見られるようになった。」としている。

洋二郎さんと3歳年上の兄との関係について、小学校時代までは完全な依存関係であったが、大学1年の暮れ兄と大喧嘩になり、それ以来兄に恐怖心を抱くようになったと父は語っている。また、父親との関係については、父親が在宅で仕事をしていたため、よくおしゃべりをしていたという。病気や将来の事で深刻な事もあったが、文学や父の仕事の話など、彼は結構冗談をこのみ、愉快的時間を共有する事も多かったとしている。その時ファザコンにならないよう、眼を外に向けるように父は努力していた。しかも、音楽を愛した彼の聞く曲によって、父親は彼の精神状態が把握できるようになっていたという。そして、22歳のこの頃になると、高校時代からの離人感がとれ、木樹の緑を緑色そのままみずみずしいと感ずること

ができるほど、現実感覚が持てるようになっていたのではないかと書いている。

死の2年前、洋二郎さんは大学ノートに手づくりの1冊の本『迷宮の孤独』を書いていた。それを父親に印刷屋を紹介してもらい、幼い頃から貯えた小遣いで92ページの本にした。その本ができたとき、彼は父親に「これでもういつ死んでもいい」とつぶやいたという。そしてその本の最後近くには次のように綴られている。「カフカは『変身』を友人に朗読したといわれているが、ぼくにはこの文章をきいてくれる友達はいない。これは遺書だ。ぼくが死んだあと、見知らぬ友達が読んだ時、初めてこれは存在することになるからだ。」

そして93年7月の下旬の深夜、洋二郎さんは父親の所にやってきて「もう駄目だ。死にたい」という。その数ヶ月前にK先生から父親の厳しさを示すようにいわれていた父親は《対決だ》という思いがわき、「死に方ぐらい教えてやる…」といったやりとりをしている。玉川大学通信教育部の3年目スクーリングの最中であった8月9日、最後の夜、午後9時半頃から父は洋二郎さんの希望にこたえて、彼の部屋で学校のこと将来のことなどの話し相手になっていた。彼はやわらかな眼差しで「なんだかすべての人が懐かしく思える。こんな気持ちは初めてだ。K先生には『感謝』と伝えたいな」とつぶやくように言った。その後すぐ、洋二郎さんは仕事場に戻った父親の部屋に現れ、スクーリングをやめることを告げている。それから2時間半後、何となく気になった父親が洋二郎さんの部屋に行ってみると、彼はベッドでコードを首に巻きつけて動かなくなっていた。

それから10日間、植物状態から脳死状態へ洋二郎さんの様態が変化していく中で、様々な父の想いが綿々と綴られている。そこからが父、柳田邦男氏の訴えたいところでもあろうが、ここでは心理療法的側面から洋二郎さんの心の現実に迫ってみたい。

Ⅲ. 「生」と「死」の間

ここで筆者は、洋二郎さんの症状や生育歴、治療過程での問題を明らかにしようとしているのではない。一般に思春期から青年期にかけて、ほとんどの若者が身体の変化と共に、恋愛や性や人間関係に悩み、時に自暴自棄になることもある。そして、自殺念慮をもったり、行動化して自殺企図を繰り返すことも少なくない。しかし、ほとんどの場合、行きつくところまで行くと、さらりと引きかえしてくるかのようになり、その症状が鎮まるにもかかわらず、ふと境界を越えて旅だってしまうことがある。その「何か」境界のようなものがあるとすれば、そこを何とか垣間見たいという思いがある。一般に精神病の回復初期に、自殺を企てるケースが多い（保坂；1995）と言われているが、筆者はそういった症状の経過上のことを問題にしているのではない。「生」と「死」を隔てるのは一本の線のようなものだとすれば、そこに立てる防壁のような「何か」が心の中にあり、それがどれほど高く、どれほど強固であるかによって、さらりと引き返してくるか、簡単に一線を越えてしまうかの違いがあると考え。きりきりの瀬戸際をさ迷う若者に会うことの多い臨床経験的には、「何かがある」という実感を持っている。しかし、きわめて言語化が難しく、まして実証的研究が可能なものでもない。ここでは、『犠牲』の記述を考察することで、少しでも言葉にしてみたい。

<客観的理解>

カウンセラーは診断をすることが仕事ではないが、心理療法を行なう場合、ある程度客観的な人間理解を試みる。ここでもまず、洋二郎さんの症状について考えてみたい。主治医は父親に対して強迫傾向や離人感を抱えた神経症と説明しているように推測されるが、日記の事細かな記述の仕方やその内容から、主治医の診断は納得できる。もう少し観てみると、1988年、入院の契機となったできごと、鉄アレイを窓に投げつけ飛び降り

ようとしたこと、そして「太陽に向かって走るんだ」と、叫んでいたことなどは妄想体験を持っていたと疑うこともできる。あるいは、父親は細心の注意を払いながら彼と接触しているが、ちょっとしたことでイライラを募らせたことなど、不安定感と衝動性は境界性人格障害に近い面もあった。また、父親と精神科医以外とは親密な交流が持ちにくく、大学のクラブに参加し必死に周りに合わせて自分をなくし、不安定になっているのは、明らかに引きこもりの特徴である。

川谷太治（2000）は、引きこもりの心性を、中島敦の『山月記』から引用して「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」をあげているが、洋二郎さんもプライドが傷つくことをひどく恐れているふしがある。例えば、M子に「すてきです」と言った日の日記には「恋愛でもない、失恋でもない、第三の道を進みたかったのだ（中略）『ありがとう、聴いてくれて、とてもうれしいよ』この出来事は、ぼくの『期待』を更新した」と記している。この『期待』を父は人と普通の付き合いができる、あるいは恐怖や苦悩から解放されるのではないかとこの『期待』と説明しているが、むしろ、プライドを傷つけられることが無いようにという『期待』ではないだろうか。また、読書傾向も「カフカ」であり「マルケス」であり「安部公房」や「大江健三郎」であって、漫画や大衆小説と言われるものに興味を向けてはいない。音楽の好みも、同様の傾向があったと思われる。そういった「臆病な自尊心」や「尊大な羞恥心」が、父が記述する中高時代の傷つき、失明の恐怖や医師の対応、あるいは彼が「生きられた時間がなかった」と記す、学校での疎外感や孤独感と深く関わっているのは間違いない。しかし、それほどまでに、傷つかざるを得なかった彼の繊細な心は、いったい何に依るのであろうか。

<共感的理解>

筆者は『犠牲』全体を通して、幼少期の彼の様子がほとんど描かれていないことが気になって

いた。著者である父にとって、洋二郎さんの自死と言う結末があまりにも衝撃的であり、思春期以降に彼が残したものが感動的なために、忘れられているのかもしれないが、そのこと自体が彼の最も深い心の傷つきではないかと思われてならない。彼が4歳の時、母親は彼の事故をきっかけにうつを主症状とした神経症に陥る。心を病んだ母に代わって、4歳の幼子に誰が母親の役割をしていたのだろう。彼が悲しい苦しいと感じた時、暖かく抱きしめてくれた人はいたのだろうか。4歳と言えば第一次反抗期から一步踏み出し、旺盛な好奇心を社会に向け、新しい人間関係を築いて急激に自我を成長させる時期である。そんな時、突然最も重要な愛情対象を失っていたとすれば、母に代わる存在が無いとすれば、彼は対象喪失の深い傷つきのまま、大人社会に順応し、自由な自我の表現法を学ばぬまま大きくなった可能性はある。大きくなった洋二郎さんは自己を社会に充分表現できない分、日記や短編小説の形で言葉を書き残している。彼が作家の息子であれば、書くことが好きであったり、書く才能を持っていても不思議ではない。が、一般に心を病む若者の多くが書くことを好むように思われる。しかも彼等の文章は哲学的であったり、宗教的であったり純粋な愛であったり、精神性が高く言葉は難しく、そのため、彼らの言葉には、ほとんど身体性が感じられず、骨と皮だけになった悲痛な叫びを必死に意味づけようとしているようで、総じて難解である。

ところで、彼の父親は言葉の世界で生きている。彼はノンフィクション作家であり、社会の矛盾や不条理を真摯な態度で問いかけ、その姿勢には崇高ささえ感じられる。そして、彼の父は緊急事態に直面した時に備えて、かねて科学知識によって自分をコントロールすることを実践してきたと言う。それは極めて徹底したもので、例えば、地震が起きると秒数を数え、縦波と横波の時間差から震源までの距離を推定し、どのような行動をとるべきかを判断することを20年以上前から習

慣づけてきた。同様に飛行機事故の場合も、客室で把握できる状況と過去の事故例の知識を重ね合わせて、起きた事故の重大さを推測するという対応を心がけていたと言う。このように彼の父は失敗が無いように、常に冷静な判断をして生きることを、自らに課してきた。そんな父の背中を覗ながら洋次郎さんが生きてきた。その柳田氏が洋二郎さんに「アンドロジナス」と罵声を浴びながらも、洋二郎さんの世話をし、母親役を演じていた。しかし、父が演じた母親は洋二郎さんの心が本当に求めていたものだろうか。そして父は「そうすればするほど依存関係からぬけさせない」と記しているが、洋二郎さんの心にとっては、母親が神経症に陥って以来、適切な「依存対象」がなかったからこそ、20歳を過ぎても母親を演じる父に、しがみつかざるを得なかったのではないだろうか。また父は洋二郎さんが心を病むようになって「もはや家庭などというものは崩壊していた」と書いているが、もともと洋二郎さんの内的世界には、家庭が構築されていたのだろうか。彼が要求していたものは、様々な矛盾や悪の側面をも包含し、ふくよかな身体性をともなった母性的風土とでも言うべきものではないだろうか。つまり、洋二郎さんが育った家庭やその環境には、それらが共有する共通感覚が確立されていなかった。そのため、母親も鬱状態からの回復が難しく、実は父自身も心的には追い込まれていたと推測できる。しかし、父の場合はそのエネルギーが社会への鋭い視点となって、ノンフィクション作家として評価され得たと考えられる。

＜母性的風土＞

筆者の言う母性的風土は、心理療法でいう「共感的理解」(澤田; 1998)に最も近いが、共感的理解のように「他者の感情を共有し理解する」といわれるような「個」と「個」の関係を表現するのではなく、むしろ場が共有する共通感覚であり、木村敏の言う『あいだ』(1988)に存在する「ぬくもり」のような感覚で、深く身体性に

ざしている。そして、それは家庭にも、地域社会にも、治療関係の中にも存在し得る。心理療法においても、まず共感的理解をしつつ、治療者の中では客観的理解が同時に始まっている。そして、より適切な客観的理解は治療関係を深め、治癒への経過を推進する。しかし、少しでも客観的理解が先行すると関係は不安定になり、破壊しないとも限らない。けれども、彼らの内面に、母性的風土が確立されている場合、多少の不安定さはむしろ、自我を強化し心理療法は中断や終了の形をとっていても、自立の道を歩むことも多い。洋二郎さんの場合、フロイディアンの流れをくむY先生の精神療法は客観的理解が先行し、彼が「きつすぎる」と感じて当然であろう。それでも、その後のK先生による精神療法や父親の援助、彼自身の努力によって、自己洞察を深め現実感覚をとりもどしていく。ただ現実感覚がもどってくれば、自己の存在と社会の現実はあまりにもかけ離れたものであることを認識せざるを得ない。そしてそれは彼の臆病な自尊心を激しく傷つけ、父が必死に母親役を演じたにもかかわらず、彼はブレイクの詩の一節を引用して「父さん!父さん!（中略）ぼくは迷子になる」と記し悲痛な叫びをあげている。この場合、ストレートに父の対応が悪かったとか、治療関係に問題があったとは考えにくい。むしろ洋二郎さんが立っていた場に、彼の心が求めていた母性的風土が存在していなかったと考えるのが適切であろう。

しかし、洋二郎さんの生前には決して共有し得なかったこの母性的風土とよぶべき感覚を、彼の死後、父は洋二郎さんと自らの身体を通して感じ始める。つまり、洋二郎さんが脳死の11日間に、本書の最後に主張している「二人称の死の視点」を父は体験している。それは病院の看護婦が、洋二郎さんが健康な時と同様に声をかけ、1日3回の清拭をしてくれる、そんな姿に接することであり、また、脳死状態になってからも、父親が訪問すると、なおも心拍数や血圧が上がったり、彼

の体が冷たくなっても父が頬に手をあれると、彼の閉じた眼に涙がにじんだといった体験である。洋次郎さんは脳死を迎えて、ようやく父と言葉ではなく体を通じて心の対話をしている。そして、そういう体験を通して、父は末期医療に対して「二人称の視点」の重要性を提案しはじめる。命を共有する「二人称の視点」は、「共感的理解」にも通じ、筆者が「母性的風土」と呼びたいものでもある。

青年期に、ふともう一つの世界に旅立つ人々には、この母性的風土と呼ぶべきものが全く存在しないか、だんだんと薄くなったり、瞬間的に切れて感じられなくなるのではないだろうか。これがたつぷりと豊かであれば、それが大きな壁となって、あちらの世界は全く見る必要がなく「死にたい」などとは考えてみることもすらいらう。しかし、母性的風土が弱々しければ、つねにあちらの世界は視界に入り、いつでも突破することができる。そして、現代社会はこのような状況が広く起こっているのではないだろうか。従って、心乱れることの多い青年期の若者達の多くが、常に生と死の瀬戸際に立たされているといえることができるだろう。

おわりに

現代の若者に「何かが違う」という思いを抱いている人は多い。そして、様々な分野、様々な方法で若者の心の問題について研究されている。「昔も今も何ら変わっていない」という意見もあるが、「質的に変化している」という指摘もある。恐らく、そのどちらもが間違いでは無いのだろうと筆者には思われる。ただ確実に大きく変化したものが一つあると筆者は考えている。それは日本の「風土」ではないだろうか。もちろん、自然環境としての風土の変化は、地球の温暖化など世界的問題であろう。しかし、高度成長期以来の日本の急激な変化は、便利さと引き換えに膨大な自然を、凄まじい勢いで破壊し続け、それが日本の特

殊性でもあり、人々の心に大きく影響していることは間違い無い。木村（1988）は「風土」は一次的には自然環境であるとしながらも、「人間が共同生活を始めて共同体を形成するやいなや言語を媒介とする『対人環境』も『風土』の一部として作用することになる」とのべている。木村の言うように『風土』に『対人環境』を含めて考えてみると、昨今、マスコミを賑わす出来事も、自殺など青年期の若者の問題も、風土の変化と関連していることが明白である。

しかし、筆者にとって、現代青年の自殺の問題、あるいは命に関わる事件など、若者の心の問題が何か解明されたと考えているのではない。「風土」が、言語を媒体とした対人関係に作用しているならば、そこに築かれた文化の問題、身体性との関連など、むしろ、ようやく筆者にも自らが研究すべき課題が見えてきたに過ぎない。

もともと、筆者が「母性的風土」とか、「風土」の変化といったことを考え始めたのは、1999年5月に、二年以上面接していたA君の死に遭遇して以来である。A君は97年の3月から99年の3月までは完全な引きこもり状態で、家族の付き添いがなければ、ほとんど出かけることができなかったため、面接といっても、電話と手紙でかろうじて関係を保っていたにすぎない。しかし、99年4月1日以来、ほとんど毎週一人で来室し、5月27日最後の日まで十数回、彼は辛そうな時もあったが、たいていは以前よりはるかに幸せそうに雄弁に語ってくれた。それから2日後、彼はふらりと家を出たまま帰らぬ人になった。その時、ふと心にうかんだのが『犠牲』の著者、柳田が、洋二郎さんの死を「夢を見ているようで、彼は一陣の風に乗って空のかなたへ飛翔していった」と語っていたことで、筆者にもA君が飛翔する姿を思い描くことができた。しかし、だんだんと日が経つに連れて、A君の死はある程度予測がつくこ

とであるにもかかわらず、未然に防ぐことが出来なかったという無念な思いが、筆者の心の中にくすぶり始めた。しかし、彼の生きた証でもある二冊のファイルに収まった面接記録や手紙、小説や詩等を手に取ることはどうしてもできず、筆者は『犠牲』を繰り返し読みかえすようになり、いつのまにか、洋二郎さんとA君がオーバーラップして見えてきた。そして、洋二郎さんの心の現実に迫ることが、A君のように青年期を思い悩む若者の問題に寄与できるのではないかと考えるようになった。そこで考えついたのが「母性的風土」という表現であった。振りかえってみればA君とA君の死との遭遇が私の心を揺さぶり、エネルギーとなってようやくここまで辿り着けたと思う。ただし、洋二郎さんの生育歴や症状とA君とは全く関係が無いことをお断りしておきたい。

ここにA君の冥福を祈り、彼の御霊にこの小論をささげます。

引用文献・参考文献

- 友久茂子 1998 学生相談とストーカー 甲南大学学生相談室紀要 第6号 49-58
- 熊倉伸宏 2000 死の欲動 新興医学出版社
- 柳田邦男 1995 犠牲 文芸春秋
- 柳田邦男 1997 体験と物語 プシケーvol.16 新曜社 71-96
- 河合俊雄 1997 フィクションとノンフィクション プシケーvol.16 新曜社 1-4
- 保坂隆 1995 うつ病と自殺 こころの科学 日本評論社 26-35
- 川谷太治 2000 境界人格障害と引きこもり 精神療法 第26巻第6号 金剛出版 24-32
- 澤田瑞也 1998 カウンセリングと共感 世界思想社
- 木村敏 1988 あいだ 弘文堂

ABSTRACT

A Study on Crisis of Adolescents
—Regarding “The Sacrifice”—

TOMOHISA, Shigeko
Konan University

This study considers the book “The Sacrifice” that was written by Kunio Yanagida. He is a nonfiction writer, and he wrote about his son who killed himself when he was still young. Adolescents commonly suffer from anguish, for example, with problems related to sexuality, friends, their family and their own existence. However, they rarely try to commit suicide. Then why is it necessary for some young people to commit suicide? We can't know directly from them, but we can learn from their death and their way of life.

So here I would like consider the death of Youichirou Yanagida who is the subject of “The Sacrifice “. His family appeared happy to outside observers, but his mother suffered from serious bouts of depression and she was unable to bring up her son, Youichirou, in a suitable manner. He showed no particular ill effects in his early youth. However, when he was a freshman at university, he broke a window-pane and tried to jump down from the second floor. Following this, his father made great efforts to help him. However, the approach his father used (from the book) seems limited to a more reasoned approach which his son was not able to handle. At the same time, the son's need for a warmer more caring approach was not satisfied.

In Youichrou's case, there was no maternal support in his family, environment or psychotherapy. And at the same time, he was forced into corner by verbal reasoning. In psychotherapy, nonverbal communication might be more effective. It is what should be named “maternal climate.”

Key words : adolescents, suicide, maternal climate
